
私は「 」が「 」です

猩々緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は「 が 」 です

【Nコード】

N7792P

【作者名】

猩々緋

【あらすじ】

私はよく彼女と一緒にいる。けれど私は彼女が「 だ。

ストーリーのない文章二つ目です。

ある日クラスメイトに言われた。

「森宮さんて香住かすみさんと仲良いよね。今日なんで休みか知ってる？」

森宮とは私のことであり、香住とは私がよく一緒にいる人だ。彼女は今日学校を欠席している。担任も彼女が欠席していることしか告げなかった。

私は首を横に振った。するとクラスメイトは「そっか、ごめんね」と行ってしまった。

彼女があのかラスメイトと親密そうに話している場面など見たことがない。数度会話をしている程度だ。おそらく、ただの興味本位だったのだろう。

私はよく彼女と一緒にいる。休み時間だったり、グループを作らなければならぬ時、必ず彼女は私のところへ寄ってくる。

何故一緒にいるのかと問われれば、好きな物が同じだったからだ。私たちの場合それは漫画だった。

私はジャンルを問わずいろいろな漫画を読んでいた。引つ込み思案だからそれをネタに誰かと話をするということは少なかったのだが、彼女は積極的に話しかけてきた。

彼女も多くの漫画を読んでいた。少女漫画に少年漫画、青年漫画に、時には成人向けのものまで読んでいるらしい。

けれど、彼女には酷い「クセ」があった。いや、正確にはクセと言わないのかもしれない。

彼女はほとんどのものを否定する。

私が話題に出した漫画を、「それ面白くないよね」と即座に否定した。私は「面白くない」と話そうとしたのではない。「面白い」と話そうとしたのだ。

「そうかなあ？」と返せば、「うん、ぜんぜん面白くない」と返ってくる。いくつか言葉を交わしたが、彼女は貶すような事しか言わなかった。

そんな会話を、今まで何十回としている。

またある時は、私がゲームをしている目の前で「それ面白くない」と私の手元を指して言った。

私は面白いとと思っているからそのゲームをしているのである。

また違うゲームをダウンロードし、面白かったので友達にも勧めてみた。体験版があったのでそれをしてみて貰うと、また彼女が「それ面白くない」と、勝手にボタンを連打して早々にゲームを終了させた。

彼女は自分が気に入った物のみしか許していないようだった。私が友達に勧めたゲームだって、彼女はプレイしたこともない。後ろからプレイを見ていたわけでもない。

彼女は私のはっきり「好きだ」と言った物まで否定する。貶す。そして最後に言うのだ。

「あんたつてくそゲーとか好きだよね」

だから、私は彼女が大嫌いだった。正直、向こうから寄って来たときには心中でため息を吐く。

けれど、私は彼女に言えていない。「構わないで」と言えていない。私は彼女に言えていない。「構わないで」と言えていない。

私は携帯に手を掛け、彼女のアドレスを引き出した。そしてメール作成画面へ移動する。

「今日どうしたの？」そう書いてメールを送信した。

私は彼女が大嫌いです。

けれど、誰かに嫌われることを恐れて「嫌い」と言えない私が、私は大嫌いなのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7792p/>

私は「 」が「 」です

2011年1月3日21時21分発行